

第4期大和市多文化共生会議 第13回会議録(要約)

日時: 2017年6月10日(土)14:00~16:00

場所: 大和市役所分庁舎2階会議室

出席: 委員(石間フロレリサ、伊藤素美、白鳥節郎、東海林まりえ、瀬谷麻里、田野井咲奈) / 大和市国際・男女共同参画課(橋本、伊藤) / 公益財団法人大和市国際化協会(酒井、田中、小西、石川) 以上 12名

欠席: 委員(猪野美里、楠瑠美子、ウプレティ マトリカ、ハゲイ パトリシア、府川貴恒) (敬称略)

## 1 これまでの会議内容

○会議は残り6か月となった。これまで1年半の間に積み重ねてきたことを土台にして、今日みなさんから報告いただく内容を検討しながら外国人の抱える課題を解決するところまで、わたしたち会議としての取り組みをつなげていきたい。

○前回の会議では、「外国人への情報提供」について、委員のみなさんに調査した内容をもとに課題のポイントや解決案を模造紙にひろげて議論してみた。

○調べてきた話を積み上げていけば良かったが、調査した内容よりも委員の持つ思いや主張がどうしても先に語られてしまった。委員一人ひとりが具体的な課題解決案を選ぶまでには至らなかった。

○事前の宿題では、みなさんが調査した結果から見えた外国人像をアンさんで表現してみたが、これはみなさんの思いではなく、調べてきた事実の積み重ね。一つひとつ確認していき、課題の解決に結びつく方策を考えたい。

○「たくさんある多言語情報を外国人につなげるにはどうしたらよいか」を課題とした上で、わたしたちができる解決案をこの会議で検討したい。

(質疑)

○委員: 情報がほしければ取りに来るだろうから、強制的に情報を届ける必要はあるのだろうか。しかし、すぐに情報を得られるわけではないので、そういう情報を受け取るしぐみの改善が必要なのではないか。

○委員: 外国人に情報が届かなくてもいいという考えは問題があると思う。その情報を使うかどうかは、本人が考えればよい。どう渡すかの工夫が必要。情報が届かないことで、本人が損をするような状況であってはいけないと思う。

○委員: その通りと思う。しかし、その人にこの情報が絶対に必要だと判断するのは誰なのか。何でもかんでも情報を渡せばいいというものではない。最低限知ってほしい情報

わた  
は渡さないといけないけれど、それ以上はいらぬのではないか。

○委員：最低限の情報というのはどの範囲をいうのか。生命に関わるような情報だったら最低限必要。ただし、健康診断など市が関与しない情報もあるので、その範囲を誰がき決めるのかむずかしい。

○委員：最低限の情報は、知っておいてくれないければ困る情報として市から渡す。それ以外の詳しい情報はこちらを見てください、と誘導できるような形にできればいいのではないか。

○委員：必要な情報は人それぞれかもしれないが、生命に関わるような情報は外国人も知っておくべき。

○委員：どんな情報であっても大切だと思う。でも、読めないで第三者(Third Party)が必要。ふりがながあっても日本語が読めないで、誰かに読んでもらうしかない。わたしは通訳の仕事をしているが、健康診断については壊れた CD みたいに毎年同じ説明を繰り返している。ある外国人は小学生の子どもがいるのだが、学校からもらうプリントをすべて読んでもらっている。彼女は子どもに関するプリントの内容を一つひとつもらさずに確認している。もちろん、分からないので誰かに読んでもらう必要がある。そういうとき、説明できる人が誰かいるといい。誰か説明できる人がいれば、月に1回でもいいので外国人が集まって情報を得ることができるので、そうした機会をつくることのできるという。

## 2 委員からの報告

### ●白鳥委員からの報告

○すべての情報を多言語化したらよい。必要な情報であれば有料でも手に入れようとするので、情報を手に入れるための何らかの方法を考えればよい。

○外国人に手取り、足取り支援することが外国人にとっていいことなのだろうか。

○必要のない情報は誰も読まないし、必要な情報ならお金を払ってでも読む。外国人も税金を払っているわけなので、こういう情報がほしいという声をあげるという。

### (質疑)

○委員：確かに無理に情報を伝える必要はないかもしれないが、だれでも困るときがあるので、インターネットなどで、ここにいけば情報が手に入るという環境はつくっておくべきと思う。一人ひとりの母語にあわせて多言語化する必要はないのではないか。

○事務局：情報の種類によって、例えば災害時の情報は外国人であれ、誰であれ確実に市から届けなければいけない。

○委員：生活情報については大和市に転入してきた際に簡単な資料を手渡すようにし

たらよい。

○委員：ただ、現在は市役所でそうして手渡しするしくみができあがっていないようだ。そこで最低限の情報を手渡ししてしまえばいい。

○事務局：前回の会議でも同じ話が出ていた。在日コリアンなど国籍が外国であっても日本語しかできない人もいる。日本人を含めて全員に多言語情報を渡してしまえばいい、という意見も出た。これまでの会議で積み重ねてきたものを前提にして、今日の報告に結び付けていけるといい。

(前回会議の振り返り)

ここで事務局から前回会議について振り返りを行った後、各委員からの報告に移った。

○委員：何のために外国人に情報を届けるのか、この会議として合意できていないので、同じ話が何度も出てくることになるのではないかと。

○事務局：宿題で「なぜわたしたちはアンさんに情報を伝えたいと考えるか」という問いがあるので、委員一人ひとりから意見を出し合い、なぜ伝えたいのか話し合っていきたい。

●石間委員からの報告

○ある外国人は情報が届いても読めないで、友人に読んでもらっている。学校の先生がふりがなを付けてくれるが、小さくて読みづらいので目が痛くなる。「寺子屋」など、分からないことは何度も説明する必要があるので、そうした説明会を開けばいいのではないかと。

○同じフィリピン人といっても、教会によってグループが違い、フィリピン人としか交流がないので、フィリピンママになってしまう。同国人だけだと日本語を使わないし、国際交流フェスティバルなど地域の情報、日本のことも分からない。

○なぜ外国人に情報を届けるのかと言えば、買い物や子育てなど日本人と変わらない暮らしがしたいから。だから、誰にでも届く情報が欲しい。外国人だから何でもお願い、助けて、ではない。

○フィリピン人は日本で生活していても、自分たちだけのフィリピンワールドに生きている。日本とのつながりをつくっていきたい。

●東海林委員からの報告

○外国人に情報が届かないのはどうしてか。日本に長く住んでいっていると慣れてしまって、新しい情報を得たいという意識が低くなる。また、身近な人から情報を得たいので、手段が限られている。

- 情報が届かない状況を解決できていないのはどうしてか。生活はできているので困っていない。また、日本語ができなくても仕事があるので、生活は安定している。インターネットがあっても、母語で検索する限り情報を得ることができない。
- 解決するためには、情報を届けるタイミング、デザインを工夫する。情報提供は早ければ早いほどいい。いろいろなタイミングをとらえて外国人へ情報を配布する。外国人向けにデザインできている情報はあまり多くない。
- 日本人にも外国人向けの情報があることを伝える。そうすることで、外国人が困っているときなど情報を必要とする人がいるとき、日本人を含め誰でも情報を提供する側になれるようにすることが大切。
- なぜ外国人に情報を届けるのか。日常生活が問題なく、周りの迷惑にもなっていないければ情報を届けようとしなくてもいいのかもしれないが、情報を得て他の人とのつながりができることで、より豊かな生活を送ることができる。満足感や幸福感を得ると、情報を発信する人にもなるのではないか。
- 相談相手がないなど生活がうまくいかないと、孤独感や疎外感が生まれ、生きる希望を失ったり、日本に対する憎悪が生まれたりする可能性がある。
- (質疑)
- 事務局：情報提供のタイミングとデザインについてはその通りと思う。しかし、例えば予防接種の案内を出すのは市役所なので、この会議としてタイミングとデザインを考慮して予防接種の案内を出せるわけではない。
- 委員：そうなのであれば、一体この会議で何をしようとしているのかわからない。
- 委員：この会議としてできること、できないことの線引きをすることが必要なのかもしれない。
- 委員：行政の情報の出し方を工夫しようとしていて、国際化協会はこれ以上タッチできないという線引きをされてしまえばそうなのかもしれない。
- 事務局：国際化協会ができることではなく、この多文化共生会議ができることを考えたい。また、行政の情報の出し方の工夫ではなく、多言語情報を外国人に届けるためにわたしたちの会議でできることは何かを検討したい。
- 委員：市役所で多言語情報の発信場所として国際化協会のことをお知らせすれば解決するのではないか。
- 事務局：行政がやるべきことではなく、この多文化共生会議として何ができるのかを考えたい。
- 委員：何を求められているのかよくわからない。
- 委員：情報を届けるのは行政であっても誰であっても構わない。線引きをしても仕方

ないのではないか。

○事務局：他市や県を含めて、提言を出し続けていてもなかなか課題が解決されていないという状況が続いている。

○委員：大和市役所、国際化協会、ボランティアの役割についての線引きがよく分からない。

○事務局：わたしの説明が悪いのが原因だと思うが、情報提供に関しては前回会議から検討してきている図式がわかりやすいと思う。

○委員：日本人を含めて、みなさんに国際化協会の窓口を知ってもらったらどうか。その情報を渡すだけのことを大和市役所ではできないのだろうか。

○事務局：すでに第1期会議でその提言を出している。今の市役所の状況としては、提言を出しても課題が解決されていないままになってしまっている。市民課を介してではなく、わたしたちが外国人に情報を届ける方法を考えたい。

○委員：防災や医療など最低限の情報は市役所を介してお知らせすべき。また、相談できる場所のことなどは人と人のつながりで伝えることができるかもしれない。(1)防災などの情報と(2)相談窓口などの情報、この2つは分けて考えた方がよい。今話し合うのは、情報を届けるためにネットワークや人のつながりをつくらうという話なのか。

○事務局：ネットワークをつくれれば情報が伝わると考えるのであれば、それが委員の提案する課題の解決策ということになる。

○委員：防災情報などの情報は市役所からきちんと届けてほしい。それが機能していないということであれば、わたしたちが市役所に提言してもいいのだと思う。

○委員：市が対応しないのであれば、認めて対応してくれるまで私たちが行政に言い続けるべきなのではないか。

○事務局：わたしたちが考えているのと同じように、他にもさまざまな要望が市に寄せられている現状があり、市民のニーズは多様化している。そのためなかなか課題が解決できていない状況が続いている。すでに提言しているので、第4期でも同じ提言をすることにはならない。行政がすべてを担うことができない状況において、外国人が抱える課題に対して、市民がどのような方策を持ってどんな役割を担えるのか、この会議で検討したい。

○委員：この会議では提言を出すのではなく、市民活動として何ができるのか考えることなのか。

○事務局：市役所が外国人に情報を届けるべきとの意見は過去の提言に盛り込まれているので、市が情報を届けるべきとの提言については、この会議ではなく、国際化協会が別の方法で進展させたい。この第4期の会議はまた別だと考えてほしい。

- 委員：同じ提言を出せないことはないのではないかと。
- 事務局：みなさんは第4期の委員なのだが、この会議も第1期から第3期までの積み重ねがあることは理解してほしい。
- 委員：違うと思う。この会議で提言を出しても解決しないかもしれないが、他のやり方を進めるしかない。
- 事務局：提言ではない方策を考えたとき、わたしたちの会議でできることは何かを考えてきた結果が今日の報告内容に結びついてくる。
- 委員：アンさんに情報が伝わらない、という状況において困っているのは誰なのか分からない。アンさんが困っていると思っていないのに、情報を伝えるのはむずかしいのではないかと。
- 事務局：なぜわたしたちはアンさんに情報を伝えたいと考えるか、という問いに関連するので、委員一人ひとりの考えを聞きたい。
- 委員：この会議で無理に提言を出そうという話はしないが、東海林委員の回答は良かった。アンさんに情報を届けるのではなく、アンさんと日本人の接点をどうやって作るか、どうすれば関わってもらえるかを考えた方がいいと思う。
- 事務局：東海林委員の報告にあるとおり、市内散策などの機会を設けて、外国人へ情報提供することはできると思う。
- 委員：情報はあることはあるので、その情報を伝える機会をつくろうということ。しかし、機会をつくったとしても、その機会をどうやって伝えたら良いか、情報が伝わらない問題はずっと残る。
- 委員：フィリピンワールドにいる人と日本人との接点をつくろうとしたとき、どこに行ったらいいのか。
- 委員：教会がまず考えられる。フィリピンだけでなく、日本人もいる。
- 委員：教会でミサがあるとしても、何かきっかけがないと話しかけることもできない。アンさんのように子どもがいる人であれば、子育て情報ひろばみたいなことで人を集められるのかもしれない。あるいは、フィリピンの料理教室の機会をつくれれば、いやでも日本人との関わりが出てくるのではないかと。
- 委員：問題は誰が主導するのかということ。
- 委員：保育園でも子育て家庭同士の接点をつくっている。しかし、英語で話せる機会があるわけではないので、そうした機会をつくっていききたい。

●伊藤委員からの報告

- 多言語情報があるとはいえ、その人の母語がない場合もある。情報をすべての人にと

っての母語に多言語化するのにはむずかしい。

○外国人の日本語力がアップするといいい。日本語は、話す、聞くはそうでもないが、書く、読むは世界一くらいむずかしい。日本語学習の機会は重要。

○外国人がいる保育園や日本語教室、会社などにわたしたちが出向いて直接的に情報渡してはどうか。教会などのフィリピンワールドへ行って、ちょっとお話しするとか。候補となる場所をリストアップしてはどうか。

○なぜ外国人に情報を届けるのか。日本人も外国人も同じで、すべての人に情報を届ける必要がある。

(質疑)

○委員：個人情報という理由から、外国人なのかどうか答えてもらえないときもある。場所を探すと、外国人がいるか教えてもらえるのか分からない。聞いてもお答えできません、と言われる場合もある。アプローチの仕方も大事になる。

○委員：教会や日本語教室などオープンな場が候補だが、まずは受け入れてくれるか場であるかどうか確認する必要があるのではないか。

● 田野井委員からの報告

○同じ国の人同士の会話で済んでしまうので、自分の国にいる感覚から抜け出せない人が多く、日本に10年以上住んでいても日本語を覚えられない。自分が何に困っているのか、深く考えることがない。

○日本語の情報を探したりすることもなし、何か問題があっても何とかするという安易な気持ちがある。何か問題があったときは、同国人同士で解決しようとする。

○中国人は WeChat をやっている人が多く、グループチャットが流行っている。一つの輪の中だけで生活していて、あまり外を向いていない。視野を広げてもらうためのアプローチが必要。

○例えば、読めない日本語の原稿があれば、画像をとってグループチャットに投稿し、誰か教えてとお願ひすれば、日本語ができる人が教えてくれる。

○わたしが知っているのは日本人と国際結婚した方がほとんどで、子どもを連れて中国に帰ろうと考えている人はいない。

#### 4 その他

次回の会議は7月8日(土)14:00～、同じ市役所分庁舎2階会議室で行う。

以上